

《研究ノート》

桜井庄太郎博士の「日本青年史」研究

高 島 秀 樹

目 次

はじめに

1. 桜井庄太郎博士と『大日本青年團史』
2. 桜井庄太郎博士の日本青年史研究
 - (1) 研究の背景と動機
 - (2) 研究の目的と内容
 - (3) 研究の基本的視点
 - (4) 研究の方法と素材
 - (5) 青年観と青年への期待
3. 桜井庄太郎博士の日本青年史研究の位置づけ
 - (1) 刊行時の位置づけと評価
 - (2) 今日的な位置づけと評価

おわりに

はじめに

桜井庄太郎（1900～1970）博士は、1942年に『大日本青年團史』を、1952年に『日本青年史』を刊行した。これらの業績は日本における青年史研究の先駆と位置づけられるものと考えられるが、残念ながら、今日その業績の詳細な内容は十分明らかにされているとはいえない。このような状況を受けて、本稿では桜井博士の日本青年史研究について、その概要を明らかにした上で、今日的視点から見た研究史上における位置づけと評価、その研究から学ぶべき点を考えることを直接的な目的とする。さらに、筆者は先に「桜井庄太郎博士の『日本児童生活史』研究」⁽¹⁾について明らかにしたが、本稿はそこで

の考察に引き続いて、日本の教育社会学の領域において独自の研究領域を開拓し、今日盛んとなりつつある教育の社会史的研究の先駆的な研究と考えられる桜井博士の児童史、青年史研究の全体像を明らかにすることを旨とするものである。

本稿では桜井博士の日本青年史研究について、独自の著作としては唯一の単行書である『日本青年史』（全日本社会教育連合会編集・青年双書11集）1952年、大蔵省印刷局刊、を中心的な素材として考察を加えていくが、その前提として桜井博士を日本青年史研究に向かわせる契機となったと考えられる『大日本青年團史』1942年、日本青年館刊、について若干紹介し、考察を加える。また、下記の論文を関連資料として利用していく。

「青少年史の研究と教育社会学」（日本教育社会学会編『教育社会学研究』第2集、1952年、東洋館出版社、所収）

「青年の社会史」（海後宗臣・牧野巽編『青少年問題と教育』講座教育社会学第3巻、1953年、東洋館出版社、所収）

なお、本稿は前稿の続稿としての性格を持つところから、本来必要であると考えられる桜井博士の研究歴や業績の全体像についての言及を一切省略している。必要な点については前稿をご参照いただければ幸いである。また構成などについて前稿を踏襲している点、内容に一部重複がある点をご了解いただきたい。

1. 桜井庄太郎博士と『大日本青年團史』

桜井博士自身は後年、その研究生活を回顧して、「昭和16年に私は、日大をやめて大日本青少年団に入った。そこでの私の仕事は青年団の歴史の編さん・記述であった。青年団のことは何も知らないで飛びこんだのだが、多くの資料があったので、当時の私の上司であった熊谷辰治郎氏の指導を受けながら、一年たらずのうちに、菊判で、資料を合わせて800ページに近いものを書きあげることができた。これは昭和17年の秋、『大日本青年団史』（熊谷辰治郎編）として出版された。／また青少年団在職中、私は全国各地の青年団を視察する機会を得、また若者とか若衆とか呼ばれた維新前の青年の生活史の一部を知ることができた。こんなことから昭和27年には、小著『日本青年史』が生まれた。」⁽²⁾と語っている。桜井博士が、大学の卒業論文のテーマとして「日本封建制度の発達」を選び、その後も日本封建社会史、日本封建社会意識についての研究を続け、1941年には『日本児童生活史』を刊行したという、隣接領域での研究実績を持っていたことが無視されてはならないが、この発言に示されているように、大日本青少年

団に所属し、『大日本青年團史』の著述にあたったことが、桜井博士の日本青年史研究の直接の契機になったと考えられる。この著述にあたっては、公的な歴史記録であることと、当時の時代的・政治的状况から一定の制約があったと推測されるが、桜井博士の日本青年史研究の直接の契機、出発点として、この著書について考察を加えておくことが必要である。

桜井博士は前述のように、1941年3月に大日本青少年団に嘱託（1942年から主事）として勤務、1945年の同団解散まで在職したが、大日本青少年団は、1925年に成立した大日本聯合青年団（1939年から大日本青年団と改称）を中心として、1941年1月に、大日本聯合女子青年団、大日本少年団聯盟、帝国少年団協會の4団体（発足時は後に大日本海洋少年団の加入が計画されていた）が当時の国策にそって統合されて成立したものである⁽³⁾。『大日本青年團史』は、この統合により単体としての大日本青年団が解散することになったところから、「本書は大日本青年団竝にその前身である大日本聯合青年団の事業・發展過程を明かにすることを目的として編纂したものであるが、我が國に於ける青年團の傳統を明かにするため、青年團の起原の問題や、青年團の母胎である若者團體にも説き及んだ。」⁽⁴⁾という目的の下に企画・刊行されたものであり、本文 471頁、附録 234頁、熊谷辰治郎の「回顧二十年」65頁を主な内容とする大著である。奥付を見ると「編著者 熊谷辰治郎、發行者 桜井庄太郎」と記載されているところから、この著書が熊谷辰治郎の著作と扱われることもしばしば見られるが、「例言」に明確に「本書は昭和十六年三月編纂に著手し、同年十二月脱稿したものである。なほ本書の編述は桜井庄太郎これを擔當した。」⁽⁵⁾と記されており、また熊谷辰治郎の「回顧二十年」においても、その「はしがき」で「この團史編纂の仕事は、

非常に大切な、しかも私としては興味と熱情の湧く仕事であるが、現在の境遇では、悉くこれに没入することが出来ない。そこで桜井庄太郎君にこの面倒な仕事を擔當して貰ふことにした。」⁽⁶⁾と記されており、この著書が桜井博士の著作であることは疑問の余地がない。

この著書の本文の主要な構成（編・章まで記載）を示すならば、次の通りである。

緒言

第一編 青年團の起原

第二編 江戸時代

第一章 江戸時代の社會と若者團體

第二章 若連中概説

第三編 明治時代（第一期 明治維新から日清戦役勃發まで）

第一章 明治時代概説

第二章 若連中の衰頹

第三章 若連中の改革

第四章 青年夜學會

第五章 若連中より青年會へ

第四編 明治時代（第二期 日清戦役以後）

第一章 青年團運動の黎明

第二章 日清戦役と青年會の活動

第三章 日露戦役と青年會の活躍

第四章 日露戦役後の青年團體の状況

第五編 大正時代（第一期 中央報徳會青年部・青年團中央部時代）

第一章 大正時代概説

第二章 内務、文部兩大臣の青年團に関する訓令

第三章 中央報徳會青年部・青年團中央部とその事業

第四章 全國青年團聯合大會の開催

第五章 明治神宮御造營と青年團の奉仕

第六章 皇太子殿下より令旨を賜はる

第七章 全國青年團明治神宮代參者大會

第八章 日本青年館建設の議と財団法人

日本青年館の設立

第六編 大正時代（第二期 財団法人日本青年館時代）

第一章 青年團中央部の事業を財団法人日本青年館に於て繼承す

第二章 關東大震災と青年團の活動

第三章 明治神宮競技大會青年團競技

第四章 大日本聯合青年團創立運動

第五章 大日本聯合青年團發團式並に第一回大會

第六章 皇室の恩寵

第七章 日本青年館の竣工

第八章 日本青年館開館式

第九章 大日本聯合青年團國庫補助に関する建議と請願

第十章 「青年訓練所令」及び「青年訓練所規程」の制定・公布と青年訓練所の設置

第十一章 皇太子殿下の日本青年館行啓

第十二章 全國地方聯合青年團の加盟完成

第十三章 帝國議會に於ける青年團に関する論議

第七編 昭和時代（大日本聯合青年團・大日本青年團時代）

第一章 昭和時代概説

第二章 青年團の光榮

第三章 皇國精神の宣揚

第四章 郷土振興運動

第五章 青年團の産業活動

第六章 青年體育の奨励

第七章 滿州事變と青年團

第八章 支那事變と青年團の銃後活動

第九章 興亜青年運動

第十章 非常災害と青年團

第十一章 青年指導と組織強化

第十二章 盟邦青年團との交驩

第十三章 大日本青少年團の結成

桜井博士の日本青年史研究にとって、この著述がどのような意味を持つかを考えると、第1に、「緒言」に記されている「然しながら青年団の活動が、それぞれの時代の社会情勢と無関係に営まれるものでないことは明かである。それ故、本書は、青年団活動の前提もしくは背景の意味に於て、それぞれの時代の社会情勢やその推移、並にこれらと青年団運動との関係にも注意を拂ひたいと思ふ。」⁽⁷⁾という考え方は、桜井博士の児童生活史研究に既に見られた視点であり、この著述において、こうした視点が青年史研究にも有効であることが認識されたという意味があると考えられる。第2に、当時の時代的・政治的状況の下においては、大日本青少年団の官製的性格が広範な資料の収集や視察を可能にしたと考えられるが、こうした資料の収集や視察によって多くの知見を得、その内容について検討や研究を進めたことが後年の研究に大きく寄与したという意味があると考えられるが、この点については桜井博士自身の回顧からも確認することができる。

2. 桜井庄太郎博士の日本青年史研究

(1) 研究の背景と動機

桜井博士は1941年に『日本児童生活史』、1942年に『大日本青年団史』を刊行したが、1952年に『日本青年史』を刊行する。この著書を刊行する背景、動機について、同書の「序」では簡潔に「日本の青年や少年の生活を、それだけまとめて歴史的に書いた本はほとんどないような思われます。女性史についてはいろいろな本が出版されており、なかなかよいものもありますが、どういうわけか青年や少年についてはあまり書かれていません。／わたしは一九四八年に『日本児童生活史』を著わしましたが、そのころから、その姉妹篇として日本の青年史

を書いてみたいと思うようになりました。」⁽⁸⁾と記されており、さらに「はしがき」においてやや詳しく「青年については心理学や社会学などの方面からいろいろと研究され、多くの書物が出版されている。しかし青年の歴史を書いた本はまれである。また恋愛とか結婚とか、あるいは農村の青年団体とかいうような限られた特殊な問題だけについて述べたものは二、三あるが、青年をめぐるいろいろな問題を総合的にとり扱った本を、わたしは見聞のせまいせいかまだ見ていない。」⁽⁹⁾と記されている。また『日本青年史』の刊行と同じ1952年時点において、この時点までの青年史研究について「なお青年を取り扱ったものとしては一九三〇年の中山太郎氏の『日本若者史』（春陽堂）、一九三六年の大日本連合青年団編・発行の『若者制度の研究』などがある。いずれもその内容は時代的に限られており、青年史としては範囲も狭く、部分的もしくは特殊的な研究というべきである。」⁽¹⁰⁾と指摘している。これらの発言に共通して見られるように、この時点において、日本における青年に関する通史が十分に明らかにされていないという状況認識を桜井博士の青年史研究の背景として指摘することができる。このような状況に対して、その欠を自らの手によって補うことが桜井博士の『日本青年史』刊行の第1の動機であったと考えられる。さらに「序」に示されているように、日本児童生活史の研究、刊行の延長として、青年史についても明らかにしなければならないと考えたことが第2の動機であったと考えられる。

(2) 研究の目的と内容

桜井博士は『日本青年史』の「はしがき」の冒頭において「古くからの日本の社会のさまざまな変化・発展のなかで、青年たちはどのような生活をいとなみ、どんな活動をしてきたであ

ろうか、また青年たちは社会にたいしてどんな役割をはたして来たであろうか。」⁽¹¹⁾と記しているが、ここに青年史研究の最も基本的な目的が示されている。ここで注意されなければならない点は、社会の変化・発展との関連の下に青年やその生活について明らかにすることを意図している点であって、ここに桜井博士の青年史研究の独自性、社会史的性格が示されていると考えられる。こうした目的を達成するためには、各時代の青年について考察する前に「まず前提として、それぞれの時代の構造・性格やつぎの社会への推移・発展などが明らかにされなければならない。」のであり、その「つぎに青少年史の固有の問題…(略)…」⁽¹²⁾を明らかにしていかなければならないと考えられている。

このような目的にしたがって、具体的に考察すべき内容は次のように示されている。

「わたしはこの書物の中で、つぎのような問題をあきらかにしたいと思う。

一、青年がはたしてきた社会的な役割

- (一) 労働・軍役
- (二) 政治活動
- (三) 文化活動

二、社会の青年観と青年の社会的地位（社会は青年をどのようにみたか、また青年にどんな社会的地位をあたえ、青年をどのように取り扱ったか）

三、青年の社会生活

- (一) 青年の生活と階級との関係
- (二) 青年の団体生活（青年はどんな団体をつくり、その中でどんな生活をいとなんだか、またそれらの団体はどんな社会的役割をもち、その活動によって、いかに社会に影響をあたえたか）
- (三) 遊戯・社交
- (四) 恋愛・結婚・家族生活

(五) 青年に関する社会問題

(六) 青年と犯罪との関係

(七) 青年にたいし、どんな教育がおこなわれたか」⁽¹³⁾

この構成からは、桜井博士は、その青年史研究の目的を、青年の社会的役割、社会の青年観、青年の社会生活を中心として取り上げることによって達成していこうとしていると考えられる。このような各時代に共通するものとして示された基本的な研究内容が、さらに具体的にどのような項目として取り上げられているかは各時代によって異なるが、桜井博士の考え方を具体的に示す例として、『日本青年史』の「7章 現代の青年」を見ると、章の初めに昭和の初めから今日までを現代と考えることが示され、その時代の特色を明らかにするために、(1)昭和時代の特徴、(2)太平洋戦争、の2項目について説明されている。その上で本文として次の各項目が取り上げられている。

1. 教育の転換… (1) 青年訓練所と青年学校、(2) 青年の渡満、(3) 戦時中の教育、(4) 戦後の民主教育、(5) 学生の社会運動
2. 青年団の活動… (1) 大日本連合青年団と産業教育、(2) 青年団の国家主義化、(3) 大日本青少年団の結成
3. 青年と労働… (1) 勤労報国運動と勤労員、(2) 戦後の労働事情、(3) 労働基準法と労働の実態
4. 戦争の犠牲… (1) 民族の悲劇、(2) 日本の軍隊
5. 女子青年をめぐる諸問題… (1) 男女共学、(2) 職場における女子、(3) 女性のてん落、(4) 人身売買、(5) 結婚と離婚、(6) 女性の関心、(7) 女子青年の成長
6. 青年の社会的地位と社会の青年観… (1) 青年の社会的地位、(2) 社会の青年観、(3) 日本の将来と青年⁽¹⁴⁾

ここでは、1. はじめにその時代の特徴をとらえた上で、2. 青年について教育と労働を中心としてその生活の実態をとらえ、3. 社会の中において青年がどのように位置づけられ、処遇されていたかを明らかにし、4. その基礎にある社会の青年観を明らかにしようとしているのであり、桜井博士の青年史研究の目的がどのような具体的内容を取りあげさせているのかを理解することができる。

なお、研究対象である青年の概念、範囲について、桜井博士は「一たい青年というのは何歳から何歳までのことをいうのであろうか。もちろん青年期は少年期と成人期の間にはさまる過渡期であるが、男女によって差があるし、ばあいによっていろいろに解釈される。しかしふつうは男は十二、三歳から青年期に入り、十八歳ないし二十三歳で成人となる。女は男よりも一年あまり早く、十歳ないし十一歳で青年期に入り、十六、七歳ごろまでにほぼ成人に達する。／したがって以下で述べることは、大たいこの青年期にある若いひとびとについてであるが、多少児童期や成人期にわたるばあいがあるかも知れない。」⁽¹⁵⁾と記している。この説明に見られるように、桜井博士は青年期の基本的特質を少年期と成人期の間にはさまる過渡期をとらえ、青年の概念は過渡期としての青年期に属する者にとらえていたのであり、具体的年代は多様であると認識していたと考えられる。

(3) 研究の基本的視点

桜井博士の青年史研究の第1の基本的な視点として、社会史的な視点を指摘することができる。桜井博士の青年史研究は前述のように、社会の変化・発展の中で、青年の生活、活動、役割をとらえようとするものであるが、このような青年史研究は青年の社会史というべきものとなると考えられる。この点に関連する桜井博士

の次の発言は、社会史をどのようなものにとらえるか、なぜ青少年史の研究において社会史的立場を選択するかについて明らかにしている。「私は、社会学を人間の共同生活・集団生活の理論と考え、かかる社会学の理論に立脚した歴史が社会史であると解釈する。言葉を換えていえば、社会史はとくに人間の共同生活・集団生活に視点を置いた歴史である。前記の青少年史の問題も私はかかる意味の社会学的・社会史的な視点から選択した。それ故、史的研究においては、社会史的といっても社会学的といっても、私にとっては同じことに帰着する。しかし青少年史の問題がすべてこれに尽きるというわけではない。…(略)…視点・見地が異ればおのずから異った問題がとりあげられるであろう。私は社会史的な立場に立つが、他の立場を否定するものではない。しかし文化史のその他に立脚する立場は、結局社会史的な立場にもとずかなければならないと考える。」⁽¹⁶⁾

桜井博士の青年史研究の第2の基本的な視点として、特定の階級・階層、個人に限定することなく、広く青年全体を考察の対象としようとする視点を指摘することができる。桜井博士は「いうまでもなく歴史をつくるものは多くの無名の民衆であって、少数の英雄や偉人ではない。これまでの歴史は英雄偉人の歴史であったが、これからの歴史は民衆の歴史でなければならない。青年史においても同じことがいえる。英雄や偉人の青年時代を書くのが青年史ではない。わたしはむしろ、黙々とはたらき、戦争でもはじまればすぐ戦場におくられ、異性との恋愛や結婚に歓喜したり悲しい涙をしばったりした無名の青年や娘たち、支配者の暴圧に抗して勇敢にたたかった庶民階級の若者たちについて述べたいと思う。」⁽¹⁷⁾と記しており、ここに桜井博士の日本児童生活史研究に共通する対象認識に関わる視点が示されている。

桜井博士の青年史研究の第3の基本的な視点として、時代認識を端的に表わす時代区分について見るならば、次のような時代区分が採用されている。

原始時代

古代（3世紀ごろを中心とする）

上代（大化の改新＝645年から平安時代の末＝1183年まで）

中世（鎌倉時代のはじめ＝1184年からいわゆる戦国時代の終り＝1602年まで）

近世（いわゆる江戸時代＝1603年から1867年まで）

近代（明治維新＝1868年から大正末年＝1926年まで）

現代（昭和のはじめ＝1926年から今日まで）

時代区分については、『日本児童生活史』では1941年刊の旧版と、1948年刊の改訂新版では微妙な差異があることを前稿で指摘したが、『日本青年史』では基本的に改訂新版にしたがい、さらに現代が加わるなど、第二次世界大戦中とは異なる戦後歴史学の研究成果を反映した時代区分が採用されている。

このように区分された各時代について、桜井博士がどのような時代認識をしていたのか、例として近世を見るならば、次のように要約してとらえることができる。

1. 近世というのはいわゆる江戸時代のことである。
- 2-1. 戦国時代にゆるみかけた封建制度は再編成されて、ほぼ完成した形を整えた。
- 2. しかしやがて封建社会の内部に矛盾が生じ、しだいに大きくなっていき、幕末になると外国の圧力も加わったため、封建制度はついに崩壊した。
- 3. 江戸時代は封建社会の崩壊期であったといってよい。

3-1. この社会ではきわめてきびしい階級制度が行われていた。

-2. 一つの階級から他の階級に移ることは、すこぶる困難であった。

-3. 同じ階級の内部にも、さまざまな差別があった。

4. 近世の封建社会は、全く固定した、閉じた社会であった⁽¹⁸⁾。

このような時代区分、時代認識に桜井博士の青年史研究の第3の基本的な視点を読み取ることができる。

（4）研究の方法と素材

前稿において、桜井博士の日本児童生活史研究が既存の歴史学の研究成果のみに依存することなく、きわめて多様な資料を活用することによって、児童の生活実態を可能な限り明らかにし、総合的に認識することを目指していたことを指摘した。この考え方は日本青年史の研究においても共通していると考えられるところであって、各時代ごとにどのような資料を用いているかを抜き出し、具体的に網羅すると次の通りである。

一章 原始社会の青年…遺物や遺跡、未開社会（から類推する）

二章 古代の青年…『魏志倭人伝』

三章 上代の青年…『万葉集』、『梁塵秘抄』、大宝令・大宝律、ものがたり文学（『竹取物語』、『宇津保物語』、『源氏物語』）、『更級日記』、西行『撰集抄』

四章 中世の青年…『おあん物語』、『吾妻鏡』、『沙石集』、『北条九代記』、『閑吟集』

五章 近世の青年…『西域物語』、『道中日記帳』、若者集団の「御役目」「掟」「申合わせ」など、河竹黙阿彌『弁天娘女男白波』、紀山人『仇競今様藪』、近松門左衛門の劇、民謡、川柳、子もり唄

第六章 近代の青年…『開化の入口』、景山（福田）英子『妾の半生』、児玉花外「紡績工女」（詩）、「軍人勅諭」、与謝野晶子「君死に給うことなかれ」（詩）、「民法」、福沢諭吉『学問のすすめ』『日本婦人論』など、雑誌『青路』

第七章 現代の青年…「大日本青年団綱領」、『きけ わだつみの声』、戦没学生の手記、世論調査結果

（付：一般的な参考文献は除いている）

このように多様な素材を広く渉猟し、総合的な認識を目ざした点に桜井博士の日本青年史研究の方法上の特色が存在すると考えられる。

（5）青年観と青年への期待

桜井博士の青年史研究の基底にある青年観はどのようなものであったのだろうか。

桜井博士は『日本青年史』が刊行された1952年までの日本社会について、基本的に保守的な社会、封建制を完全に払拭していない社会と認識した上で、「一たい保守的な社会では、どこでも古いしきたりが重んぜられ、伝統が尊重されるものである。したがってそのように社会では、古いことをよく知っており、前からの慣習になれている老人が社会の尊敬をうける。同時にそのような社会では、あたらしいもの、みなれないもの、ききなれないものは排斥され、古いことを知らない若い者はけいべつされる。明治以後、今日にいたる日本の社会はそのような社会であった。」と把握し、そのような社会の中での青年の位置づけについて「それ故、なに事につけても、どんなばあいでも、年功が尊ばれ、年長者がうやまわれる。逆に若い者は、青二才とか、クチバシが黄色いとか、乳くさいとかいわれて軽くみられる。青年の意見は正しいばあいでも、若いクセにとか、ナマイキだとか言っていてにされない。」「日本の社会が

老人ばかりを尊んで、青年を不当に軽視し、あなどってきたことは以上に述べた通りであるが、老人や壯年からみれば、青年は働かせるものであり、利用すべきものであった。老人や壯年の指導者はしばしば純情の青年を利用し、多大のギセイを拂わせてきた。満蒙開拓青少年とか、太平洋戦争における特攻隊とか、例をあげるまでもないであろう。また日本の産業資本の発展のかけに、どんなに多くの男女の青少年のギセイがひそんでいるかを思うべきである。」と説明している。こうした青年の社会的な位置づけは教育に関しても、「教育に力を入れなかったのは、次代をになう青年を本気に考えなかったからであろう。…（略）…現在の教育制度や施設は、向学心にあふれる都市や農村の青年の希望をみとすには決して十分ではない。」という状況を生み出していると指摘している。そして最終的に「いずれにせよ、社会は青少年をおろそかにしているのではないか。次代の社会をになう青年にたいして、老年・壯年層はもっとあたたかい愛情をもつべきではないか。」⁽¹⁹⁾と結論づけている。この指摘に見られるように、桜井博士は日本社会の特質と関連づけて、日本社会において青年がどのように位置づけられていたのかを初めに明らかにしている。一方、「青年は何といっても未完成であって、思慮においても、社会的経験や知識においても成人に及ばない。青年はいたずらに、成人に甘えたり、そのおだてに乗ったりすることなく、また成人の無理解にたいしてすぐ怒ってしまったりしないで、確実に自己の実力を養いそだてることに力を注ぐべきであろう。」⁽²⁰⁾と、青年自身にも考えなければならない点があることを指摘している。

このように日本社会における青年の位置づけと青年自身の課題の両面について明らかにした上で、桜井博士は「もちろん青年には多くの長

所があり、美点がある。何よりも尊いのは青年の若さのうちにひそむ限りない可能性である。青年はよい指導さえあたえられれば、無限にといえないまでも、すくなくとも大きく伸びるさまざまな素質をもっている。また青年の精神はまだ社会の汚れに染まず、その若々しい心は正義と不正とにたいして敏感である。社会的惡にみたされた成人の世界を正しくするものは青年の純粋な魂だけであるとも考えられる。」⁽²¹⁾と、その長所を明らかにしているが、ここに桜井博士の青年観が端的に示されている。桜井博士は青年に対して基本的に「…(略)…未来への期待は青年にたいしてかけられる。」⁽²²⁾という認識、期待を持ち続けていたのであり、『日本青年史』の叙述を次のような青年への信頼と期待を現わす文章でしめくくっている。

「わたしは日本の青年の将来を信じ、日本の青年に望みをかけたい。愚かしい戦争によって多くのすぐれた青年を失ったことは限りない不幸であり、悲しみであった。しかし生き残った青年たちと、あとから成長して来る若者たちの誠実を信じたい。いまの日本の運命をきりひろくものは現代の青年をおいてほかには求められない。『未来はわれらのものなり』といった或る若い学者があったが、わたしは『未来は青年のものなり』と言いかえたいと思っている。」⁽²³⁾

ここには、桜井博士の日本の児童に関する、「…(略)…雄々しさ、その正しさと叡智」を認め、「日本の児童は、いつの時代でも、いかなる場合でも、常に明るく正しかったし、また元気だった。」と認識する児童観、「あかるい児童の生活に暗い影がさしたこともないではなかったが、それは児童の罪ではなく、むしろ誤った児童観をもったその時代のおとなのためであった。」⁽²⁴⁾とする、児童とそれを取りまく社会のあり方についての認識、「かように今日はまことに苦難に充ちた時代である。しかし日本の児

童は、これに耐え、これにうち克って力強く生い立ち、やがて輝かしい眞の民主主義日本をきずくであろう。」⁽²⁵⁾とする児童への期待と基本的に共通する認識があったといえる。

3. 桜井庄太郎博士の日本青年史研究の位置づけ

(1) 刊行時の位置づけと評価

はじめに、桜井博士の『日本青年史』が刊行された当時、どのように位置づけられ、どのように評価されていたのか、当時の書評を参照してみたい。

日本教育社会学会の機関誌『教育社会学研究』は、「教育史に関する最近の著書」という拡大書評で同書を取りあげている。書評を担当した仲新は桜井博士の『日本青年史』について、第1に「原始社会から現代に至るまでを簡単にまとめたものではあるが、これまで類書の出版されたものもなく新しい分野を開拓したものとして注目される。」と、この領域における先駆的な研究成果であることを評価し、教育史という視点からは「いわゆる狭い意味での青年教育についての叙述は比較的少いけれどもそのことが却って社会における青年の地位や役割を広く理解し、それによって各時代の青年の教育を理解する上に役立つであろう。」と、限界があることを指摘しつつも、逆にその研究の優れた点も指摘している。そして総合的に「本書は従来あまり開拓されていない分野に新に鉄を入れ、今後の教育社会学的見地に立つ青年教育史の研究に先駆をなすものとして注目されるであろう」⁽²⁶⁾と、評価しているが、基本的にこのような評価は今日の時点から見ても、なお妥当なものと考えられる。

(2) 今日的な位置づけと評価

桜井博士の『日本青年史』について、今日の時点において、どのように位置づけられ、どのように評価することができるのか、また今日その研究から学ぶべき点はどのような点であるかについて、最後に考えたい。

第1に、桜井博士の『日本青年史』に代表される青年史研究は、日本における青年史研究の歴史の上で先駆的な位置づけを持つと考えられる。

桜井博士自身は『日本青年史』の刊行と同じ1952年時点で、前述のように「なお青年を取り扱ったものとしては一九三〇年の中山太郎氏の『日本若者史』（春陽堂）、一九三六年の大日本連合青年団編・発行の『若者制度の研究』などがある。いずれもその内容は時代的に限られており、青年史としては範囲も狭く、部分的もしくは特殊な研究というべきである。」⁽²⁷⁾と指摘しているが、たしかに総合的な青年史、青年の社会史、その通史と称しうるものは、桜井博士の『日本青年史』以前には見られなかった。中山太郎『日本若者史』は、『日本若者史』と称しながらも、その「序」において「若者史は、夙に誰かの手によって、纏められてるべき筈なのに、その計劃あることさへ聴かぬのは、元より此の問題の小なるためではなくして、案外その資料を集めるに、骨の折れることが原因するのだと考へてゐる。」と、これまでの研究状況は正しく指摘されているものの、ただちに「我國の若者と稱する團體は、公選の認めたもので無いだけに、…」⁽²⁸⁾とここで言う「若者」が「團體」を意味するとの限定を加えている。こうした内容に限定されることは、その目次を見ても明瞭であり、中山太郎『日本若者史』はその書名にもかかわらず、若者集団の歴史を明らかにするものであって、総合的な青年史、青年の社会史を明かにするものということはできない。一方、大日本連合青年団編・発行の『若者

制度の研究』はその書名が端的に表わしているように、若者制度についての研究である。このような青年史研究の歴史に照らし合わせて考えるならば、桜井博士の『日本青年史』が、わが国における総合的な青年史、青年の社会史研究史上で最も早く公刊された通史であるといえる。

第2に、桜井博士の『日本青年史』は、今日においてもなお類書の刊行を見ない、唯一の日本の青年に関する通史であると位置づけられると考えられる。

この桜井博士の『日本青年史』が刊行されたのは1952年であって、その後日本における歴史研究はきわめて多くの研究成果を蓄積してきており、社会史という新たな視点に基づく研究の隆盛も見ている。一方、青年についての社会学的な研究も数多く見られるようになってきており、さらに教育史の研究も活発に行われている。しかし、筆者が知りうる範囲では、歴史学の分野においては日本の青年を対象を限定した通史として公刊されたものは見られない。一方、青年についての社会学的な研究の多くは現代の青年や青年文化などの特質を明らかにしようとするものがほとんどである。教育史の分野における研究については、かつては制度史が中心であり、近年アナル派を中心とする社会史的視点の影響を受けた新しい教育史の摸索が見られるものの、日本の青年の歴史、あるいは青年教育史の通史の刊行にはいたっていない。日本の青年に関する歴史的な研究としては、教育社会学者の手による青年集団の歴史的研究が見られるほか、民俗学の分野でかつての青年やその生活、青年集団について明らかにしようとする研究が見られる程度であって⁽²⁹⁾、青年全体に関わる通史の提示にまでいたった研究成果はまだ見ることができない⁽³⁰⁾。このような状況をふまえて考えるならば、桜井博士の『日本青年史』は今日においてもなお、日本の青年の歴史を通史

として明らかにした、唯一といって良い貴重な研究成果であると位置づけられる。

第3に、桜井博士の『日本青年史』に代表される青年史研究は、今日、歴史学、教育史学の研究において比重を高めつつある社会史的な視点を早くから取り入れていた研究であると位置づけられると考えられる。近年、歴史学、教育史学の研究において、かつての制度史を中心とする傾向から、社会史という新しい視点が大きな比重を持つ傾向への変化が生じてきている。この社会史的研究の特徴について、社会史的研究の隆盛を生む契機となったアナール派を中心を見ると、次のように指摘されている。

「このように、『アナール』がめざしたのは、『全体史』としての社会史であった。『全体史』とは、人間をばらばらにしないで、そのまるごとにおいてとらえるために、歴史の領域で地理学、経済学、政治学、社会学、心理学、宗教学等の人間諸科学のあいだの壁を打ち破り、人間諸科学の結合を促進し、人間や人間集団を総合的な視角からとらえようとする研究である。」
「忘れてならないことは、歴史学が担うこの統合化の使命は、図式化によってではなく、具体性の名において果たされなければならないということであり、『アナール』がよびかけた社会的なものへの包括的アプローチは、基本的に、経験的な方法に基づいていた。／歴史家の仕事は、人間や人間集団のあいだに切れ目のない派生関係の連鎖を見出し、その無限にゆたかで多様な結合のあらゆる組み合わせをとらえることにあり、単純化や抽象化によってではなく、むしろ複雑化することによって、『社会』を、その人間関係のかぎりないもつれが明るみに出すさまざまな意味とともに、理解し、把握することにあるからである。」⁽³¹⁾

ここで指摘されていることは、1. 人間・人間集団の総合的な認識、2. それを具体的に経

験的な方法に基づいて明らかにする、3. 人間と集団の間関係を明らかにすることによって、社会について理解する、という点であると考えられる。この考え方に基づいて、あらためて桜井博士の『日本青年史』の内容を見ると、第1に、前述のように桜井博士が「はしがき」において「つぎのような問題をあきらかにしたいと思う。」として示した項目から見ると、この著書が青年の総合的な認識を目指すものであることが理解される。第2に、この著書がきわめて具体的に各時代における青年のあり方を明らかにしていることは、どの時代についての叙述を見ても明らかである。第3に、青年と青年集団、その両者間関係について明らかにしていることはいうまでもないが、さらに青年と社会の関係について明らかにすることを目ざしていることは、前述の問題点の中に青年の社会生活とならぶ解明すべき内容として、青年が果たしてきた社会的な役割、「社会の青年観と青年の社会的地位（社会は青年をどのようにみたか、また青年にどんな社会的地位をあたえ、青年をどのように取り扱ったか）」という項目が設けられていることから明らかである。このように考えると、桜井博士の『日本青年史』はきわめて早い時期に今日の社会史的な視点を取り入れて行われた研究であると評価することができる。

おわりに

このような検討の結果から考えるとき、桜井博士の『日本青年史』、日本青年史の研究は、この領域における先駆的な研究としての歴史的な評価を持つだけでなく、社会史的な視野に立った研究として、その研究視点、研究内容は今日の研究水準、研究方向から見ても十分積極的に評価することができる。

今日、青年や青年文化についての研究は数多

く見られるが、その理解のために歴史的背景や形成過程を明らかにすることが必要であること、さらに現実の青年をめぐる多くの問題について説明する上でも歴史的な理解が必要であることを考えると、桜井博士の日本青年史研究は今日においてもなお学ぶべき点を多く持った示唆に富んだ研究であり、きわめて大きな意味を持つといっても過言ではない。

・[注]

- (1) 高島秀樹「桜井庄太郎博士の『日本児童生活史』研究」(『明星大学社会科学研究紀要』第17号、1997年、所収) 63頁
- (2) 桜井庄太郎「たどって来た道」(奈良女子大学『社会学論集』5・6・7号、1964年、所収) 3頁
- (3) 桜井庄太郎『大日本青年團史』1942年、(附録) 224～225頁
- (4) 同上 例言(頁表記なし)
- (5) 同上 例言(頁表記なし)
- (6) 熊谷辰治郎「回顧二十年」(同上、所収) 2頁
- (7) 桜井庄太郎 前掲(1942年) 6頁
- (8) 桜井庄太郎『日本青年史』1952年、3頁
[以下、1952年Aと表記]
なお、本書の構成については前稿、注2)を参照されたい。
- (9) 同上 11頁
- (10) 桜井庄太郎「青少年史の研究と教育社会学」(日本教育社会学会編『教育社会学研究』第2集、1952年、所収) 92頁 [以下、1952年Bと表記]
- (11) 桜井庄太郎 前掲(1952年A) 11頁
- (12) 桜井庄太郎 前掲(1952年B) 93頁
- (13) 桜井庄太郎 前掲(1952年A) 11～12頁
- (14) 同上 148～180頁
- (15) 同上 13頁
- (16) 桜井庄太郎 前掲(1952年B) 93～94頁
- (17) 桜井庄太郎 前掲(1952年A) 12頁
- (18) 同上 71～72頁
- (19) 同上 175～179頁
- (20) 同上 179頁
- (21) 同上 179頁
- (22) 同上 180頁
- (23) 同上 180頁
- (24) 桜井庄太郎『日本児童生活史(新版)』1948年、205～206頁
- (25) 同上 209頁
- (26) 仲新「教育史に関する最近の著書」(書評)(『教育社会学研究』第4号、1953年、所収) 119頁
- (27) 桜井庄太郎 前掲(1952年B) 92頁
- (28) 中山太郎『日本若者史』1930年、1頁
- (29) 佐藤守『近代日本青年集団史研究』1970年
平山和彦『青年集団史研究序説』上・下、1978年
瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』1972年
多仁照廣『若者仲間の歴史』1984年
不破和彦編著『近代日本の国家と青年教育』1990年
なお、1986～87年に刊行された『歴史のなかの若者たち』も個別領域の研究(例:野口武彦『江戸わかもの考』、中野収『現代史のなかの若者』)を集めたものであり、青年史の通史とはなっていない。
- (30) 青年の歴史に関する研究状況については、次の各論文を参照した。
柴野昌山「青年社会学」(日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986年、所収) 558～560頁
二関隆美「青年文化」(同上、所収) 561～562頁
柴野昌山「青年社会学」(森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、所収)

869頁

柴野昌山「青年文化」(同上、所収) 870頁

- (31) 竹岡敬温『『アナル』学派と『新しい歴史』』
(竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』1995
年、所収) 12~13頁

[参考文献]

Gillis., J. R. *Youth and History—Tradition
and change in European age relations,
1770-present*. 1981. 北本正章訳『＜若者＞の社
会史』1985年、新曜社

桜井庄太郎『大日本青年團史』1943年、日本青年
館(本書は1942年に大日本青年團残務整理委員
会が刊行したものであるが、1943年に市販版と
して日本青年館から再刊されており、著者は本
稿作成にあたり再刊版を使用した)

桜井庄太郎『日本児童生活史(新版)』1948年、日
光書院

桜井庄太郎『日本青年史』1952年、大蔵省印刷局

桜井庄太郎「青少年史の研究と教育社会学」(日本
教育社会学会編『教育社会学研究』第2集、1952
年、所収)、東洋館出版社

桜井庄太郎「青年の社会史」(海後宗臣・牧野巽編

『青少年問題と教育』(講座教育社会学 第3巻、
1953年、所収)、東洋館出版社

岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民
統合』1996年、未来社

佐藤守『近代日本青年集団史研究』1970年、御茶
の水書房

瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』1972年、未来
社

多仁照廣『若者仲間の歴史』1984年、日本青年館

中山太郎『日本若者史』1930年、春陽堂

平山和彦『青年集団史研究序説』上・下、1978年、
新泉社

不破和彦『近代日本の国家と青年教育』1990年、
学文社

山岡健『「若者組」の研究—年輩序列を基礎とした
年齢集団』1986年、教育出版センター

付記：煩雑になることを恐れ、本稿作成にあたっ
て使用した参考文献であっても前稿に参考文献
として示したものは、特に必要と考えられるも
の以外は桜井博士の著書も含めて全て記載を省
略した。

(たかしま ひでき、本学科教授)